

9. 競技者の柔道技術に対する自身の評価と コーチによる評価の一致度の検討 —大学女子柔道選手を対象とした事例研究—

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程	高野 綺海
早稲田大学大学院スポーツ科学研究科	中川原知波
セコム株式会社	一色くるみ
帝京科学大学	松井 高光
東京学芸大学	久保田浩史

キーワード：女性アスリート、指導者、コーチング、技術評価

9. Agreement between Athletes' and Coaches' Evaluations of Judo Techniques: A Case Study of University Female Judo Athletes

Ayami TAKANO	(Doctoral Course The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University)
Chinami NAKAGAWARA	(Waseda University, Graduate School of Sport Sciences)
Kurumi ISSHIKI	(Secom Co., Ltd.)
Takamitsu MATSUI	(Teikyo University of Science)
Hiroshi KUBOTA	(Tokyo Gakugei University)

Key words : Female athletes, coaches, coaching, technical evaluation

Abstract

This paper is a case study of university-level female judo athletes and their coaches that examines whether the evaluations of judo techniques by athletes and coaches were in agreement with each other using video footage of the athletes' performances. The results confirmed that, in coaches' evaluations of the athletes' judo techniques, the likelihood of them agreeing with athletes' evaluations was mixed. Meanwhile, coaches' evaluations were more

likely to be in closer agreement, although some differences existed in the evaluation criteria. The results of this study, suggesting the potential discrepancies between athletes' and coaches' perceptions of technical aspects, provide useful basic data for the future coaching of women's judo.

1. 緒言

スポーツにおいて、コーチとは、選手を指導する立場にある人であり、コーチングとは、選手・チームとの間に良好な関係を築きながらパフォーマンスおよび有能さを向上させるために思考し、指導する行為のことである（図子、2014；伊藤、2017）。選手とコーチの関係について、選手にとって親しみやすく何でも話せるコーチに対して満足感が高いことが明らかになっている（豊田、2012）。コーチと選手の関係性を捉える際には、コーチの行動面に加え、感情面や思考面についても視野に入れる必要がある（栗林ら、2015）。選手に良い影響を及ぼすコーチとは、専門種目に対する知識と技能を備え、選手を上達させることができるコーチ、そして選手の存在を受け入れて熱心に指導し、選手からの信頼が厚いコーチだとされる（澁倉、2012）。スポーツにおいてコーチと互いに意思疎通を図り、理解し合い、良好な関係性を築いていくことが非常に重要である。しかしながら、選手とコーチの相互理解という点において問題があること、コーチングの効果感における選手とコーチの間には乖離があることも指摘されている（Kavassanu et al, 2008；鶴瀬ら、2018）。コーチングに関して選手・コーチ間で共通認識が十分に形成されていない場合、十分なコーチング効果が期待できないと考えられる。それは、複数のコーチ間のコーチングに関する認識に乖離がある場合も同様であろう。

また、スポーツにおける技術力とは、最も効果的な動きを状況に応じて適用できる実践的能力であり、それを高める「技術トレーニング」は、スポーツパフォーマンスにとって最重要項目の一つである（佐藤、2017）。技術力は動きのコツとカンで形成されており、コーチは、選手がこのコツとカンを得るための指導をすること、加えて、選手がコツやカンを理解しているか評価する必要がある。しかし、コツやカンは目に見える特徴として捉えることができないため、選手がどのような場面でどのように実施しているかを評価できる能力がコーチに求められる。技術の指導を行う際は、選手のレベルなどの個人的特性を十分に考慮したうえで精選する必要があることから、コーチと選手の技術に対する認識に乖離があると、選手の競技パフォーマンスは向上しにくい。これまで行われてきた選手とコーチ間の信頼関係に関する研究においては、選手からの信頼が厚いコーチが、選手にとって良い影響を及ぼすことや、コーチはアスリートからの信頼を強化する努力が必要であると報告されている（澁倉、2012；Zhang & Chelladurai, 2013）が、技術面における選手とコーチの認識の差に焦点をあてた研究はみられない。

柔道におけるコーチングに関しては、柔道の指導を行う際に何を重要視して指導を行うかは指導者によって異なっている。柔道の技術は多種多様であり、指導者が選手に対して技術の感覚を伝えたり再現したりする際には、選手の動きや技を十分に分析して評価を行い、理解したうえで指導することが重要である。柔道における選手とコーチの関係性については、全国大会レベルの選手は監督に対して高い信頼感を示したことが明らかになっている（岡田ら、2016）。また、指導者と選手の信頼関係の強さは男女ともに必要なことであるが、一般的に女性は依頼心や依存度が高いことや、男女で得意とする技術の傾向は異なることを踏まえると、女子選手を指導する際

には、その技術を把握、分析し、さらには女子特有の心理的特徴などを踏まえて技術的指導法、コーチング法を構築することが、女子柔道のさらなる強化につながると指摘されている（木村、2006；出口、2006）。このことから、女子の特性を考慮したコーチング法を探索することは非常に意義があるといえる。

以上のことから、女子柔道のコーチングにおいても、競技者の柔道技術の自身の評価や認識が、コーチによる技術の評価や認識と一致していない場合、競技パフォーマンスの向上は困難になると予想される。しかしながら、これまで、女子柔道選手とコーチの柔道技術の評価および認識に乖離があるのか、それとも共通認識が形成されているのか、またコーチによって評価および認識が異なるのかを検討したものはない。

そこで、本研究では、大学女子柔道選手およびそのコーチらを対象に、選手本人の試合映像を用いて、柔道技術の評価が選手とコーチで一致するのか、コーチ間で共通認識されているのかを事例的に検討することとした。

2. 研究方法

i) 調査対象者

本研究では、大学柔道部に所属する女子選手10名および同柔道部のコーチ3名を対象とした。対象者のプロフィールは表1に示す通りである。選手の年齢および競技歴は、平均値±標準偏差で記載した。なお、選手の競技レベルは、大学入学以降の成績である。また、コーチ3名の指導員資格については、全日本柔道連盟による公認柔道指導者資格である。コーチAおよびコーチCについては、稽古への参加は選手と同様であるが、コーチBのみ週1回程度の参加である。

表1 対象者プロフィール

〈選手〉		〈選手の競技レベル〉	
年齢(歳)	競技歴(年)	全国出場有り(入賞)	全国出場無し
21.3±1.19	15.5±1.96	8(3)	2

平均値±標準偏差

〈選手の階級〉

階級(級)	48	52	57	63	70	78	78超
人数(名)	3	3	2	1	1	1	0

〈コーチ〉

	年齢(歳)	コーチ歴(年)	指導員資格
コーチA	42	18	A
コーチB	29	6	B
コーチC	24	2	C

ii) 調査期間

各選手自身の試合映像を用いた技術評価（自己評価およびコーチによる評価）は、2020年8月～11月に行った。

iii) 試合映像を用いた柔道技術の評価

試合映像について、本研究では、対象となる選手が大学入学後に出場した大会において、立ち姿勢から投技を試みた場面（ポイントの有無を問わない）をランダムに抽出した。各選手につき10シーンを選び、1シーンあたり約10秒の映像を評価対象とした。10シーンに①～⑩の番号をつけ、本研究の対象の選手10名およびコーチ3名に視聴させた。その後、①～⑩について、「技術が優れていると思う」順番に並び替えるよう指示をした。試合映像の視聴回数は自由とした。技術的に優れていると考える順位が、選手とコーチの間でどの程度一致するのか、またコーチ間で共通するのかを検討するため、順位相関係数を算出した。加えて、映像を並び替える際に注目したポイントおよび観点について、対象者全員にインタビュー調査を行い、その内容を分析した。

iv) 統計解析

映像を用いた技術評価において、各選手と各コーチが並び替えた映像の順位の差を検討するために、ケンドールの順位相関係数を算出した。順位相関係数を算出した後、ケンドールの順位相関係数検定表より有意点を求め検定を行い、有意性を判定した。また、各選手に対するコーチ間の差を検討するため、ケンドールの一致係数を算出した。一致係数を算出した後、検定を行い、有意性の判定を行った。本研究では統計的有意水準はすべて5%に設定した。

3. 結果

柔道技術評価における選手・コーチ間およびコーチ間の順位相関係数の一覧を表2に示した。

表2 柔道技術評価における選手・コーチ間およびコーチ間の順位相関係数の一覧

	コーチA	コーチB	コーチC	コーチ間
選手A	0.333	0.333	0.467	0.717*
選手B	0.778*	0.511*	0.689*	0.908*
選手C	0.689*	0.289	0.600*	0.779*
選手D	0.200	-0.111	0.467	0.760*
選手E	0.200	0.511*	0.333	0.725*
選手F	0.556*	0.289	0.689*	0.801*
選手G	0.422	0.044	0.511*	0.495*
選手H	0.467	0.022	0.467	0.693*
選手I	0.244	0.244	0.333	0.418*
選手J	0.689*	-0.022	0.733*	0.379*

*: $p < 0.05$

選手Aについて

選手Aと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手AとコーチA、B、Cの間に有意な関連は認められなかった（コーチA： $r_k=0.333$ 、 $p=0.211$ 、コーチB： $r_k=0.333$ 、 $p=0.211$ 、コーチC： $r_k=0.467$ 、 $p=0.074$ ）。

また、3名のコーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連（ $W_k=0.717$ 、 $p=0.007$ ）が認められた。

選手Bについて

選手Bと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手BとコーチA、B、Cの間に有意な関連は認められなかった（コーチA： $r_k=0.778$ 、 $p=0.004$ 、コーチB： $r_k=0.511$ 、 $p=0.049$ 、コーチC： $r_k=0.689$ 、 $p=0.004$ ）。

また、3名のコーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連（ $W_k=0.908$ 、 $p=0.018$ ）が認められた。

選手Cについて

選手Cと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手CとコーチAおよびCの間に有意な関連が認められた（コーチA： $r_k=0.689$ 、 $p=0.007$ 、コーチC： $r_k=0.600$ 、 $p=0.020$ ）。選手CとコーチBの間には有意な関連は認められなかった（ $r_k=0.289$ 、 $p=0.283$ ）。

また、3名のコーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連（ $W_k=0.779$ 、 $p=0.010$ ）が認められた。

選手Dについて

選手Dと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手DとコーチA、B、Cの間に有意な関連は認められなかった（コーチA： $r_k=0.200$ 、 $p=0.474$ 、コーチB： $r_k=-0.111$ 、 $p=0.474$ 、コーチC： $r_k=0.467$ 、 $p=0.073$ ）。

また、3名のコーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連（ $W_k=0.760$ 、 $p=0.009$ ）が認められた。

選手Eについて

選手Eと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手EとコーチBの間に有意な関連（ $r_k=0.511$ 、 $p=0.049$ ）が認められた。選手EとコーチAおよびCの間には有意な関連は認められなかった（コーチA： $r_k=0.200$ 、 $p=0.474$ 、コーチC： $r_k=0.333$ 、 $p=0.211$ ）。

また、3名のコーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連（ $W_k=0.725$ 、 $p=0.008$ ）が認められた。

選手Fについて

選手Fと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手FとコーチAおよびCの間に有意な関連（コーチA： $r_k=0.556$ 、

$p=0.031$ 、コーチC： $r_k=0.689$ 、 $p=0.007$) が認められた。選手FとコーチBの間には有意な関連は認められなかった ($r_k=0.289$ 、 $p=0.325$)。

また、3名のコーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連 ($W_k=0.801$ 、 $p=0.011$) が認められた。

選手Gについて

選手Gと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手GとコーチCの間に有意な関連 ($r_k=0.511$ 、 $p=0.049$) が認められた。しかし、選手GとコーチAおよびBの間には有意な関連が認められなかった (コーチA： $r_k=0.422$ 、 $p=0.107$ 、コーチB： $r_k=0.044$ 、 $p=0.721$)。

また、3名のコーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連 ($W_k=0.495$ 、 $p=0.002$) が認められた。

選手Hについて

選手Hと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手HとコーチA、B、Cの間に有意な関連は認められなかった (コーチA： $r_k=0.467$ 、 $p=0.074$ 、コーチB： $r_k=0.022$ 、 $p=1.0$ 、コーチC： $r_k=0.467$ 、 $p=0.074$)。

また、3名のコーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連 ($W_k=0.693$ 、 $p=0.007$) が認められた。

選手Iについて

選手Iと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手IとコーチA、B、Cの間に有意な関連は認められなかった (コーチA： $r_k=0.244$ 、 $p=0.371$ 、コーチB： $r_k=0.244$ 、 $p=0.371$ 、コーチC： $r_k=0.333$ 、 $p=0.211$)。

また、3名のコーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連 ($W_k=0.418$ 、 $p=0.001$) が認められた。

選手Jについて

選手Jと各コーチが作成した柔道技術評価の順位の一貫度を、ケンドールの順位相関係数を算出し検討した。その結果、選手JとコーチAおよびCの間に有意な関連 (コーチA： $r_k=0.689$ 、 $p=0.007$ 、コーチC： $r_k=0.733$ 、 $p=0.004$) が認められた。選手JとコーチBの間には有意な関連は認められなかった ($r_k=-0.022$ 、 $p=1.0$)。

また、3名のコーチが作成した映像ランキングの順位の一貫度を、ケンドールの一致係数を算出し検討した。その結果、有意な関連 ($W_k=0.379$ 、 $p=0.001$) が認められた。

映像を評価する観点について

試合映像を見て、技術的に優れた順に並べる際に、何を重視して並び替えをしたかの質問に対し、以下の回答を得た。

コーチA) 理にかなった技であるか、相手を崩しているか、タイミングがあっているか、いわゆる上手い技か (強引ではない技)、最後まで極めきれているか (スコアにつながっているか)、

- 相手が反応できない技（相手との駆け引きの裏をとる）、選手の特性に合った技であるとより高く評価した、技をかける前の動きも評価した（良い動きからの技はより高く評価した）
- コーチB）他者に習得が困難な順、真似しづらいかどうか
- コーチC）技のスピードとタイミング、相手の力を利用しているか、ポイントの有無
- 選手A）組手の優劣で自分が組手で良いところを持てていない時にどれだけいいタイミングで技をかけているか、技に入って相手が耐えた時に良い位置から相手を押し込んでポイントになげられているか、相手の崩れ方などの状態に対して適した技をかけているか
- 選手B）最後の決め、技の入り方
- 選手C）流れ、つなぎ、自分のコントロール力、理想的な形であるかどうか
- 選手D）得点よりも技の巧みさ、意識していた課題とその結果としての動き
- 選手E）自分の組手になった時に技に入れているか
- 選手F）組手からの技のつなぎ方、練習してきたことができているか
- 選手G）相手に対して正しい攻め方や技の選択ができているか、ポイントが取れたか、投げる気で最後までかけ切れているか
- 選手H）技の入り方
- 選手I）技のキレと勢い、自分がいいタイミングだと思うもの
- 選手J）うまいなと思ったところを見た

4. 考察

本研究では、大学女子柔道選手およびそのコーチらを対象に、選手本人の試合映像を用いて、柔道技術の評価が選手とコーチで一致するのか、コーチ間で共通認識されているのかを事例的に検討した。

まず、柔道技術の評価における選手とコーチの一致度について考察する。技術的に優れていると判断した順に、投技の施技シーンをランク付けし、順位相関係数を算出することで技術評価の一致度を検討した。その結果、選手とコーチの評価を比較した結果、コーチ3名全員と一致したことが認められた選手は1名のみであった。コーチAおよびコーチCと一致したと認められた選手は3名、コーチBのみと一致したと認められた選手が1名、コーチCのみと一致したと認められた選手が1名、いずれのコーチとも一致しなかった選手が4名という結果であった。選手と評価が最も一致したのはコーチCであり、次いでコーチA、コーチBの順であった。また、コーチ間における一致度については、全ての選手の技術評価において一致していると認められたものの、選手G、I、Jの3名における技術評価の一致度は低かった。これらの結果から、コーチが選手に対して行う技術評価と選手が自身に対して行う技術評価の一致度は、選手やコーチによって異なり、完全に一致する場合もあれば、大きく異なる場合もあることが示唆された。この理由の一つには、柔道技術を評価する観点の違いが挙げられる。映像を見て優れると思う順に並び替えをする際の観点は、選手およびコーチ3名ともそれぞれ異なるものであった。特に、選手と最も一致する数が少なかったコーチBについては、その観点も一致する選手はほとんどいなかった。選手や他のコーチ2名が組手の形や技に入るタイミング、コントロールの仕方、技のつなぎ方、また課題としていたことができているかなどの具体的な観点を挙げていたが、コーチBは「他者に習得が困難であり真似しづらいかどうか」という観点であった。先行研究によれば、技の形を重視するコーチもいれば一本を取りに行く意識を重視しているコーチもいる（野瀬、2008）。また、

Maekawa et.al. (2013) は、柔道競技力を評価する視点として、組手の厳しさ、受けの強さ、寝技の強さ、試合のうまさ、組手のスタイル、技の粘り、体力の充実（筋力、筋持久力、スピード）、技のキレ、メンタルの強さ（気が強い、粘り強い）の9項目を挙げている。柔道競技力を評価する観点は数多くあり、人によって異なる可能性がある。本研究でみられた選手、コーチの技術評価のズレには、柔道の技術を評価する観点が、選手、コーチによって異なっていたことが一つの要因として考えられる。

また、選手・コーチ間の一致度を検討した結果と、コーチ間の一致度を検討した結果を比較すると、コーチ間ではある程度、一致する傾向にあるが、選手とコーチ間では、個々で一致度合いが異なることが示唆された。このことは、選手とコーチの技術評価の視点が、主観と客観で異なっている可能性を示している。つまり、選手が考える自身の柔道の技術評価と、コーチが考えるその選手の柔道の技術評価の認識が異なるということである。この柔道の技術評価の認識の差をなくし、共通認識を持つためには、選手とコーチでミーティングを行うなどして、考えや感覚の共有をすることが必要であると考えられる。

次にコーチ間の差について考察する。コーチ3名の指導者資格は、コーチAがAライセンス、コーチBがBライセンス、コーチCがCライセンスである。また、指導年数もコーチAが一番長く、次いでコーチB、コーチCという順の年数である。指導年数が最も短く、指導者資格もCライセンスであるコーチCが最も多く選手と技術評価が一致していた。内山（1990）は、資格を有しているコーチが、必ずしも万全な指導が行え、個人あるいはチームを成功へと導くことができるとは限らないと述べている。本研究の結果からも、指導者資格や指導年数が技術評価の一致度に直接影響するとは限らないといえる。前述の結果の理由として、コーチCは他のコーチと比べて選手と実際に組み合って練習する機会が多く、これにより選手の技術を詳細に理解しやすい環境にあった可能性がある。さらに、コーチCは選手からコーチになって間もないこともあり、コーチ3名の中で選手の立場に最も近いことも理由として考えられる。選手との共有時間という観点から考えると、コーチBは練習に来る頻度が週に1回程度であるため、最も一致率が低いという結果になった可能性がある。先行研究（豊田、2012）において、選手とともに練習に取り組むコーチが、選手に最も影響力を持つと報告されていることもとも矛盾しない。また、コーチの競技歴・競技成績をみても、3名とも大学まで競技を続けていたため競技歴には大きな差はないが、大学時代の競技成績には違いがあり、全国大会出場経験があるのはコーチCのみであった。このことが、コーチCの技術評価の一致度に影響した可能性も考えられる。対象とした選手も全国大会に出場している者が10名中8名で、競技レベルが高い。コーチCが選手と同様に競技レベルが高いという点から考えると、コーチ自身の過去の経験、競技力という点も一致度に関係しているかもしれない。

さらに、性差の観点から考えると、コーチCが女性であることも、技術評価の一致度に影響した可能性がある。女子選手にとって、同性のコーチの方が技術指導を受け入れやすいのかもしれない。佐藤（2017）は、技術は選手のレベル、年齢など個人的特性を十分に配慮したうえで精選する必要があると述べている。また、出口（2006）は先行研究において、男子と女子では柔道技術の特徴に違いがあると指摘している。この違いが、コーチCと選手の技術評価の一致度に影響した可能性がある。さらに、豊田（2012）の先行研究においては、選手に対して影響を与えるコーチの能力として専門的な知識や能力や競技力を着実に向上させる能力だけでなく、親しみやすく何でも話せるコーチが、選手のコーチに対する全体的な満足感を高めることができると述べてい

る。これらのことを踏まえて本研究の結果を考えると、男性指導者が女子選手を指導する場合、選手の特性を正確に把握し、信頼関係を築くことが重要である。そのためには、指導者と選手が十分な時間を共有し、技術指導だけでなく、選手の考えや課題について対話を重ねることが求められる。技術トレーニングは、スポーツパフォーマンスにとって最重要項目の一つであり（佐藤、2017）、コーチが選手の技術を高めるために指導することは、選手の競技力向上のために重要である。しかし、選手の立場からすると、信頼している指導者の助言は実践しやすいが、信頼していない指導者の指導には消極的になる可能性がある。豊田（2012）は、選手がコーチに対して感じる信頼感が、指導の受容度に影響を与えると指摘している。特にある程度自身の考えを確立させている大学生であればその可能性が高い。技術に対する認識のズレが大きいと、選手がコーチの指導に納得しにくくなり、結果として信頼を損なう可能性がある。そのため、コーチと選手が技術について共通の理解を持つことが重要である。だからこそ選手を十分に理解して、両者が信頼し合った上でのコーチングが必要となる。

次に特徴的な選手をピックアップして考察を試みる。選手Iにおいて、コーチBのみ極端に一致率が低く、コーチAおよびコーチCと大きく異なる結果となった。次に、最も競技レベルの高い選手Cに焦点をあててみる。選手Cの技術分析におけるコーチとの一致度およびコーチ間の一致度は、他選手と比べて、高いとは言えない結果であった。このことから、競技レベルが高い選手ほど、コーチとの技術評価が一致すると予想したが、選手Cの結果はそれを支持しなかった。この要因として、競技レベルが高い選手は独自の戦略や技術観を持つため、コーチの評価と必ずしも一致しない可能性がある。しかしながら、本研究の限界にもなるが、本研究の対象選手は競技レベルが比較的高く、レベル差が小さいため、競技レベルと技術評価の一致度の関連性を明確に示すことは難しい。今後、競技レベルの幅が広い選手を対象に調査を行い、より詳細な検討が必要である。

以上のことから、本研究で対象とした大学女子柔道選手とコーチの技術評価に乖離が見られた。また、コーチ間での技術評価には一定の共通性があるものの、個々の評価基準には違いがあり、一致度に差が生じることも示唆された。しかしながら、本研究は一大学の柔道部を対象とした事例研究であり、他の所属においても同様の結果が得られるかは今後の検討が必要である。今後、対象を拡大し、検討していく必要がある。研究の限界を踏まえた上ではあるが、本研究で示された選手とコーチの技術評価のズレは、今後の女子柔道のコーチングにおいて、選手の認識とのすり合わせを重視する必要性を示唆する基礎資料となるだろう。今後、選手とコーチの認識のズレを解消するために、技術評価における共通基準の策定や、対話を通じた相互理解の促進が求められる。

5. まとめ

本研究では、大学女子柔道選手およびそのコーチらを対象に、選手本人の試合映像を用いて、柔道技術の評価が選手とコーチで一致するのか、コーチ間で共通認識されているのかを事例的に検討した。その結果、選手とコーチの柔道技術の評価は、一部の選手とは一致し、一部の選手との一致は認められないこと、コーチ間での柔道技術の評価は、概ね一致する傾向が見られたが、評価基準に若干の違いが存在することも確認された。本研究の結果、選手とコーチの技術面における認識にズレが存在することが示唆されたことは、今後の女子柔道のコーチングにおいて有益な基礎資料となるだろう。

本研究は対象者が限定的であり、事例的研究であった。今後、本研究の結果をより広範に適用可能なものとするためには、調査対象を拡大し、異なる競技レベルや年代の選手、男子柔道選手を対象とした研究が必要である。また、本研究では試合映像を用いて技術評価を行ったが、評価手法によって結果が異なる可能性がある。今後は、試合映像の分析に加えて、選手やコーチへのインタビュー調査や、実技を用いた評価手法の導入も検討する必要がある。

【引用参考文献】

- 伊藤雅充 (2017) コーチとコーチング. 日本コーチング学会編, コーチング学への招待. 大修館書店: 東京. pp.12-25.
- 内山治樹 (1990) コーチの資質に関する一考察—競技スポーツにおける倫理的・道徳的諸問題解明の端緒として—. スポーツ教育学研究. Vol. 10, No. 1, pp.13-24.
- 鵜瀬亮一, 石田航, 生田孝, 内山渉, 西原康行 (2018) 大学野球の指導者および選手の状況認知—VR 視界動画を見ながらの語りを通して—. 日本教育工学会論文誌, 42 (Suppl.): 9-12.
- 岡田弘隆・金丸雄介・小野卓志・増地克之・山口香・市村操一 (2015) 高校柔道部員のコーチに対する信頼感の競技レベルによる違いと学校差. 筑波大学体育系紀要, 39: 13-21.
- Kavussanu, M., Boadley, I.D., Jutkiewicz, N., Vincent, S., and Ring, C. (2008) Coaching Efficacy and Coaching Effectiveness: Examining Their Predictors and Comparing Coaches' and Athletes' Report. *Sport Psychologist*. 22: 383-404.
- 木村昌彦 (2006) 指導における性差. 中村良三編, 女子柔道論. 創文企画: 東京. pp.89.
- 栗林千聡・佐藤寛 (2015) CARM-Q版のジュニアテニス選手への適用の試み. スポーツ心理学研究, 42 (2): 93-102.
- グッドコーチに向けた『7つの提言』(2015) 文部科学省コーチング推進コンソーシアム
- 佐藤徹・渡辺良夫 (2017) 技術トレーニング. 日本コーチング学会編, コーチング学への招待. 大修館書店: 東京. pp.98-125.
- 澁倉崇行 (2012) スポーツの社会心理. 中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二編, よくわかるスポーツ心理学. ミネルヴァ書房: 京都. pp.102-103.
- 図子浩二 (2014) コーチングモデルと体育会系大学で行うべき一般コーチング学の内容. コーチング学研究, 27 (2): pp.149-161.
- Zhang, Z., Chelladurai, P. (2013) Antecedents and consequences of athlete's trust in the coach. *Journal of Sport and Health Science*, 2 (2): 115-121.
- 出口達也 (2006) 技術特性. 中村良三編, 女子柔道論. 創文企画: 東京. pp.41.
- 豊田則成 (2012) 競技心理. 中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二編, よくわかるスポーツ心理学. ミネルヴァ書房: 京都. pp.140-141.
- 野瀬清喜 (2008) 柔道学のみかた—若き柔道家・指導者たちのために. 文化工房: 東京. pp.88-113.
- Maekawa N, Hirose N, Ito K, Ishii K, Koshino T, Yazaki R, and Tamura M: The method of expert evaluation of specific abilities to practice judo – proposition of Japanese top level university judo coaches, *Arch Budo*, 9 (3), 219-225, 2013.